オーテピア

知の拠点、オーテピア誕生
―高知のランドマークに刻んだ技術と想い

電材営業部 高知支店 里見賢次

日本初の県市合築図書館

2018年に高知市追手筋に開館した新図書館複合施設「オーテピア」の事例をご紹介します。同施設は「高知図書館」・「高知声と点字の図書館」・「高知みらい科学館」の3施設で構成されており、地上9階・ 地下1階の中間免震構造で、延床面積約22,800㎡の大型施設です。運営は高知市民図書館本館と高知県立図書館の共同運営で、都道府県立図書館と市立図書館の合築は日本初です。

コンセプトは、本に親しむ・情報を探す・科学を楽しむ・星空にときめく、「知」の複合拠点「オーテピア」。図書館は四国最大規模となる約205万冊の収蔵能力を有します。みらい科学館にはプラネタリウムが設置されており、800万個の星がきらめく美しい夜空や、鮮やかな宇宙の映像が頭上いっぱいに広がります。また、体験型展示ゾーンや定期的に開催されているサイエンスショーは、子供だけでなく大人も十分に楽しめる内容です。1階には、声と点字の図書館があり、障がいがある方も読書を楽しめる施設になっています。

基本構想込められた思い

オーテピアは、2010年に新図書館基本構想検討委員会の委員長を彌典前会長が務められた事もあり、当社にとって、とても思い入れのある施設です。当初は郊外への建設が計画されていましたが、「交通弱者にこそ使ってほしい施設は、中心地にあるべきだ」という委員会の判断により、高知市の中心部に建設されることとなりました。基本構想で目指す図書館像として挙げられた考え方（ユニバーサルデザイン・充実した情報インフラ環境・安心の防災機能・優れた省エネルギー性能・積極的な地産材の活用）が 随所に反映された施設となっています。

新図書館基本構想検討委員会
（左から1人目が彌典前会長）

当時、資材や人件費の高騰を受けた入札の不調と再入札や東洋ゴム株式会社の免震ゴム性能偽装問題による工事中断などがあり工期は1年4ヵ月ほど延長になりました。その後、約半年間の準備期間を経て、待望の開館となりました。

「絶対に受注する」
―強い思いが導いた1億円超の契約

当社は、照明器具をはじめとして総額1億円を超す資材を受注させていただきました。電気工事のJVの親会社である荒川電工株式会社様への受注活動に際しては、貴嗣社長に営業支援をいただききました。価格交渉は、非常に厳しいものになりましたが、多くの方々にご支援とご協力をいただき、何とか受注に繋げることができました。彌典前会長が携わったこの物件は「どんな事があっても受注しないといけない!!」との思いで営業活動をしていましたので、受注ができた時は本当に感激し、ひと安心した瞬間を今でも覚えています。

現場ではその後もいろいろな苦労があり、最後の1年は、毎日が打ち合わせ・商品手配・現場納品でしたが、今となってはそれも良い思い出です。特に照明器具では、基本設計のベース照明が蛍光灯だったため、LEDへの設計変更の打ち合わせに時間を取られました。発注者側の承認もすぐに出してもらえず、JV担当者も私も納期の面で大変ヤキモキしたものです。

照明器具の色温度は基本を温白色（3,500K）とし、温白色が設定されていない機種は電球色（3,000K）を採用。そのため明るく落ち着いた雰囲気に仕上がっています。玄関ホールに設置された5台の特注LEDパイプ吊りペンダントにはDMXドライバーボックス・再生機が組み合わされていて、時間帯により色温度が変わる様に演出プログラミングがされています。これらは、携帯タブレットで色温度（RGB）・光束を自由に変えることもできます。このように、建設当時の新しい技術を取り入れたことが、ご利用者の快適性を高める一因となっています。

今も続く人気
―高知のランドマークとして定着

待望の開館日は、夏休み期間中だったこともあり、オープン24日目で来館者が10万人に達するなど大盛況の幕開けを迎えることができました。こうして、当社も関わることができた施設は、2025年の現在も開館時間には入場を待つ人々が列をなす日もあるほど、高知県内外の方々に愛される人気のランドマークとなっています。

	工事概要
発注者	高知県教育委員会
設計・管理	佐藤総合計画・ライト岡田設計 設計業務共同企業体
電気設備工事	荒川・片岡・山下特定建設工事共同企業体
工期	2014年10月14日～2017年12月15日
電気設備工事の落札金額	881,312,000円（税抜）
当社納入商材	照明器具・照明制御設備・自立形高圧気中開閉器盤・避雷針設備、配線器具などB材
納入金額	116,000,000円（税抜）